「三論」用語の普及時期について

――慧皎『高僧伝』における用例の検討を通して――

米森俊輔

一、問題の所在

今日の仏教学においては、ある特定の三つの文献を指示し、「三論」と呼称している。特定の三つの文献とは、鳩摩羅什（三五〇頃―四一〇頃、以下、羅什と略す）によって翻訳された、『中論』四巻、『百論』二巻、『十二門論』一巻の計三部七巻の漢訳論書である。[①]「三論」という語は、原義的には単に〈数詞＋普通名詞〉で「（不特定の）三つの論書」を意味する熟語であるが、いつ頃からか、特定の文献を指示する、固有名詞的性格を有した名詞となっていったのである。

では、「三論」の語は、いったいいつ頃から特定の文献を示す名詞とされるに至ったのであろうか。過去の研究では、(1)羅什門下の僧導（―四五四―?）が初めて用いたという説と、(2)羅什の伝訳当初からすでに成立していたという説の二説がある。しかし、この二説には疑問があり、結論を先に述べる形になるが、筆者は「三論」という用語が、羅什や僧導よりも後代に成立したのではないかと考えているので、本稿ではこの点について論述していきたい。

二、従来説とその疑問

従来の研究で『中論』等を指示する用語としての「三論」の成立については、前述のように、(1)僧導が初めて用いたという説と、(2)羅什の伝訳当初からすでに用いられていたという説の二説が存在する。

まず、(1)説の論拠は、慧皎（四九七―五五四）撰『高僧伝』巻第七「僧導伝」の次の記述にある。[②]

> 迺著二成実三論義疏及空有二諦論等一（大正五〇・三七一頁中）

この資料の「成実三論義疏」については次の三通りの解釈の余地がある。次に示す。

ア、僧導が「成実三論義疏」という一部の文献を著した。

イ、僧導が「成実義疏」「三論義疏」という二部の文献を著した。

ウ、僧導が「成実義疏」「中論義疏」「百論義疏」「十二門論義

疏」の四部の文献を著した。このうちの「成実義疏」を除く三部について、後代の慧皎が「三論義疏」と呼んだ。

このうち、ア、イの解釈をした場合、僧導が「三論」の語を用いていたということは言えるだろう。しかし、ウの場合、そうとは言いきれない。すなわち、僧導はたまたま、後に「三論」と呼称される文献に疏を製したが、僧導は「三論」というまとまりを意識していないにもかかわらず、後代の慧皎が「三論義疏」と表現した、という可能性が生じる。ウの場合、僧導が特定の文献を意味する語として「三論」を用いていたことにはならない。また、ア、イの場合でも、僧導が「三論」の語を用いていたという可能性は示せても、その呼称を始めた人物であるという証明はできない。したがって、右の資料のみからでは、僧導が特定の文献を指示する「三論」という名詞を用いていたとは言いきれない。

次に(2)説であるが、この主張は平井俊榮氏によってなされている。③平井氏の論拠は、僧叡（三五二―四三六）撰「中論序」（『出三蔵記集』巻第十一所収）の次の記述である。

百論治レ外以閑レ邪、**斯文**祛レ内以流レ滞、**大智釈論**之淵博、**十二門観**之情詣。尋二斯四一者、真若二日月一入レ懐、無レ不二朗然鑑徹一矣　（大正五五・七七頁上）

【和訳】

『百論』は外道（の謬見）を治療することによって邪執を静め、この文（『中論』）は内道（における謬見）を払拭することによって迷いを洗い流す。『大智度論』の深淵かつ広博なること、『十二門論』の趣があり理にかなっていること。この四つの文献に教えを求める者は、まことに、太陽や月が懐に入ったようであり、明るく、徹底した境地を見極めないということはないのである。

「三論」に『大智度論』を含めて「四論」と呼ぶ場合があるが、ここに僧叡が、後に「四論」と呼ばれる四つの文献を並列させていることは注目に値する。平井氏はこの記述から、『中論』等の四つの論書を「四論」という総称で呼ぶことは、すでに羅什門下でなされていたのであろうと論じている。④さらに、平井氏は「三論」についても次のように言っている。

（僧叡が「中論序」で）『大智度論』を加えた四論の特徴を簡潔に叙しているところからも、すでにクマーラジーヴァによる伝訳の当初から、「三論」乃至「四論」という通称は、おのずから成立していたものと考えられる（一〇頁。括弧内は筆者）⑤

しかし、「中論序」において、「四論」という語は決して用いられていないから、筆者には、右のように即断できないのではないかと思われる。また、仮に、僧叡が「四論」というまとまりを意識していたとしても、ただちに、僧叡が「三論」という総称を用いていたということにはならない。

以上のように、従来説には少なからず疑義をはさむ余地があるように思われる。改めて資料を見直し、「三論」という語が固有の文

献を指示する名詞として、いつ頃から用いられるようになったかを検討し直す必要があるだろう。

三、「三論」の翻訳時期

では、「三論」という用語の成立は、時代的にはいつ頃を最上限と考えるべきであろうか。「三論」が『中論』等の漢訳論書を指示する用語である以上、羅什によって漢訳された時期をさかのぼってその用語が成立したとは考えられない。したがって、まずは「三論」が翻訳された時期を確認しておきたい。「三論」の翻訳時期に関しては、すでに優れた研究があり[6]、筆者はそれに新しい見解を加えることができない。したがって、詳しい説明は先行業績に譲り、ここでは概略を述べるだけに止めたい。ちなみに、羅什が長安で訳経活動を開始したのは四〇二（弘始四）年である。

まず、「三論」のうち、訳出時期が最も早いのは『百論』である。『百論』は少なくとも、二回翻訳されている。実は、四〇二（弘始四）年に最初の翻訳が終わっていたようであるが、現伝している『百論』は、四〇四（弘始六）年に訳了されたものである[7]。四〇二年の段階では、羅什が長安に来て間もなく、漢訳能力に限界があり、四〇四年に再び翻訳し直した、というのが真相のようである[8]。

次に、『中論』の翻訳についても、二回なされたと考えるのが妥当のようである。その時期については、最初の翻訳は四〇五（弘始七）年以前[9]、二回目の翻訳は四〇九（弘始十一）年と考えられる[10]。現伝しているのは二度目に翻訳されたものである。『中論』の翻訳が二回行われた理由についてははっきり分からないが、おそらく、『百論』と同じように、一度目が試訳、二度目が決定訳であると考えるべきであろう。なお、『十二門論』の翻訳については、特に問題なく、二度目の『中論』漢訳と同時か、その直後に漢訳が行われたと考えてよいようである[11]。

以上、「三論」の漢訳時期について概観した。「三論」が出揃ったのは、二度目の『中論』の漢訳と『十二門論』の漢訳が行われた四〇九年である。したがって、「三論」というまとめ方がなされ得るのは、四〇九年以降と考えられる。

四、羅什の訳経論とその門下の著述

羅什の没年には諸説あるが、だいたい四〇九年から四一三年の間に推定されている[12]。「三論」が出揃った四〇九年は羅什の最晩年にあたる。したがって、「三論」というまとめかたが、すでに羅什によって用いられていた可能性がないとは言えない。そこで筆者は、『大正新修大蔵経』所収の羅什翻訳とされる経論を検索した[13]。しかし、「三論」という語を見つけることはできなかった[14]。そこで、羅什の訳経論についてはひとまず考察の対象から外し、羅什門下に「三論」という語が用いられていないか調査した。

単独の文献として伝えられ、『大正新脩大蔵経』（＝「大正」）、『新纂大日本続蔵経』（＝「新卍続」）に収められている羅什門下の著

述を以下に示す。

僧肇（三七四／三八四―四一四）『肇論』一巻（大正四五・一八五八）

僧肇『宝蔵論』一巻（大正四五・一八五七）

僧肇『注維摩詰経』十巻（大正三八・一七七五）

僧肇『金剛経註』一巻（新卍続二四・四五四）

竺道生（三五五―四三四）『法華経疏』（新卍続二七・五七七）

しかし、これらの文献から「三論」という用語を検索することはできなかった。

また、前出の「中論序」がそうであるように、『出三蔵記集』には、羅什門下が著した経論序などが多く収められているので、これについても同時に調査した。『出三蔵記集』所収の羅什門下の著述を以下に示す。

a、僧叡「喩疑」（巻第五）

b、僧叡「大品経序」（巻第八）

c、僧叡「小品経序」（巻第八）

d、慧観（四二四―四五三間に七十一歳で没）「法華宗要序」（巻第八）

e、僧叡「法華経後序」（巻第八）

f、僧叡「思益経序」（巻第八）

g、僧肇「維摩詰経序」（巻第八）

h、僧叡「毘摩羅詰提経序」（巻第八）

i、僧叡「自在王経後序」（巻第八）

j、僧肇「長阿含経序」（巻第九）

k、僧叡「関中出禅経序」（巻第九）

l、慧観「修行地不浄観経序」（巻第九）

m、慧観「勝鬘経序」（巻第九）

n、僧叡「大智釈論序」（巻第十）

o、僧叡「中論序」（巻第十一）

p、曇影（四〇五―四一八間に七十歳で没）「中論序」（巻第十一）

q、僧肇「百論序」（巻第十一）

r、僧叡「十二門論序」（巻第十一）

しかし、以上のいずれの文献にも、「三論」の語は登場しなかった。以上の調査の結果、筆者は、羅什やその門下が「三論」というまとめかたをし、特定の文献を指示する語として用いていたという説に賛成することができない。

ところで、hに「中百二論」という表現がみえることに注目したい。すなわち次に示す。

此土先出諸経、於二識神性空一、明言処少、存神之文、其処甚多。**中百二論**文、未レ及此。又無二通鑑一、誰与正レ之。先匠所二以輟レ章遐慨、思二決言於弥勒一者、良在レ此也（大正五五・五九頁上）

【和訳】

中国で（羅什より）以前に訳出された諸経典においては、識神は本性として空であることについて明言することが少なく、一

方で識神が存すると述べる文章が甚だ多い。「中論」「百論」の二論の文章も、まだ中国に伝来していなかった。また、普遍的な基準となるべき見解もなく、誰が誤りを正すことができよう。先匠・釈道安が絶筆して嘆き、弥勒菩薩に決定的な言説を願ったのは、まことに理由のあることである。

筆者が調査した限り、羅什門下の著述に、「中百二論」という表現がみえるのは右の一文だけである。しかし、hの著者僧叡は、どうして「三論」と言わず、「中百二論」と言い、『十二門論』をここに含めないのであろうか。

また、「中百二論」というまとまりは、羅什門下において特別な意味を有するものであったと思われる。すなわち、『出三蔵記集』巻第十四所収の「鳩摩羅什伝」にもこの呼称が登場する。

従二須利耶蘇摩一、諮二稟大乗一。乃歎曰、吾昔学二小乗一、譬下人不レ識レ金、以二鍮石一為上妙矣。於レ是広求二義要一、誦二**中百二論**一

（大正五五・一〇〇頁下）

【和訳】

（羅什は）須利耶蘇摩に師事し、大乗仏教を受け継いだ。その際、羅什は嘆息して言った。「私が昔、小乗仏教を学んでいたことは、例えば、金を知らない人が、鍮石（銅の一種）を珍重するようなものであった」と。そこで（羅什は）大乗仏教の要義を学ぶため、「中論」「百論」の二論を誦した。

羅什が小乗を改め大乗を学び始めた際に、「中百二論」を誦したということは、大乗仏教を鼓舞した羅什はもちろん、その門下においても注目される故事であったに違いない。僧叡が「中百二論」と言うのは、この故事を踏まえたものであろう。つまり、中観派を代表する文献を示す用語としては、「三論」よりも、羅什門下においては「中百二論」という表現が先行してあったのではないか。

ちなみに、右の『出三蔵記集』「鳩摩羅什伝」の記事を踏襲したと思われる『高僧伝』巻第二「鳩摩羅什伝」の箇所には、次のように記されている。

乃歎曰、吾昔学二小乗一、如下人不レ識レ金以二鍮石一為上妙。因広求二義要一、受二誦**中百二論及十二門等**一

（大正五〇・三三〇頁下）

ここで、「中百二論」に「及十二門等」という文が付加されているのは興味深い。後述するように、『高僧伝』には『中論』等を指示する「三論」の語が盛んに用いられている。おそらく、慧皎が『高僧伝』を著した頃には一般化していたのであろう。そのため、慧皎は「中百二論」という『出三蔵記集』の表現に違和感を持ち、「及十二門論等」の六字を加えたのではないだろうか。

以上、羅什の訳経論及びその門下の著述を調査したが、「三論」という用語を全く見つけることができなかった。代わりに、僧叡が「中百二論」というまとめ方をしている例をみつけることができた。『出三蔵記集』「鳩摩羅什伝」によれば、羅什は大乗仏教を学び始めた際に、「中百二論」を誦したというから、羅什やその門下においては、「三論」というまとまりよりも、「中百二論」というまとまり

の方が重要な意味を持っていたのではないだろうか。しかし、羅什以後、その訳経論の研究が進むに連れて、「中百二論」に『十二門論』が加えられ、「三論」と称されるようになった。したがって、その特定の文献を示す「三論」という用語が成立した時期は、少なくとも羅什の没後と思われるのである。加えて、羅什の直門の著述にも「三論」という語の用例がみあたらない。したがって筆者は、特定の文献を指示する「三論」という語の成立は、羅什の直門よりも時代が下がるのではないかという感を抱く。

五、慧皎撰『高僧伝』における「三論」

筆者が調査した限り、『中論』等を指示する「三論」という名詞がみえる文献として最も時代が早いのは、慧皎によって五一九年から五五四年までの間に著された『高僧伝』である。[15] ところで、『高僧伝』は、幾種かの文献を参照し、多分に取り入れて著されたものである。[16] そこで、『高僧伝』に先行し、また、慧皎も参照した可能性がある次の文献から「三論」の語を検索した。[17]

a、僧祐『釈迦譜』五巻（大正五〇・二〇四〇）
b、宝唱『比丘尼伝』四巻（大正五〇・二〇六三）
c、僧祐『弘明集』十四巻（大正五二・二一〇二）
d、僧旻・宝唱等『経律異相』五十五巻（大正五三・二一二一）
e、僧祐『出三蔵記集』十五巻（大正五五・二一四五）

しかし、以上のいずれの文献にも「三論」の語は用いられていない。また、『高僧伝』の下敷きとなった僧伝集で、最も整備していたものとして、宝唱（―五一六―）の『名僧伝』三十一巻があった。この文献は現伝していない。ただし、日本の鎌倉時代の宗性（一二〇二―）がこれを抄出した『名僧伝抄』一巻が現存している。したがって、『名僧伝抄』に「三論」の語が用いられていないか調査した。しかし、ここにも「三論」という呼称はみえなかった。

a c eの著者である僧祐（四四五―五一八）は仏教史家として知られ、多くの歴史的資料としての価値を有する文献を著した。[18] また、b及び『名僧伝』を著し、dの作成に関わった宝唱は僧祐の弟子である。ちなみに、『名僧伝』が著された時期は五一四（天監十三）年である。[19]

a―eの文献の撰述年代を確認したい。まず、僧祐の手になるa c eであるが、このうちa cについて正確な撰述年は不明である。また、eについては、斉の建武年間（四九四―四九七）に一応の原型が完成し世に行われたが、僧祐自身によって晩年まで増補が繰り返された形跡がある。[20] したがって、a c eの成立は、その最下限を僧祐の没年の五一八年にまで設定しなければならない。また、bの撰述年時には諸説あるが、五一六―五一七年頃の撰述と思われる。[21] また、dは五〇八年に荘厳寺僧旻（四六七―五二七）によって原型が著され、五一六年に宝唱等が増補・編集することによって成った文献である。[22] 以上から、大雑把ではあるが、a―eの文献及び『名僧伝』は、最下限僧祐の没年の五一八年には全て出揃っていたとい

うことが言える。そして、これらの文献に『中論』等を指示する「三論」という用語が見えない。つまり、五一八年頃の段階で、固有の文献を意味する「三論」という語は一般的に用いられるところではなかったと言えないだろうか。

では、『高僧伝』において、「三論」という語はいかなる用いられ方をしているのだろうか。この用例を検討することによって、「三論」という用語の成立についての何らかの手がかりが得られないだろうか。そこで次に、『高僧伝』における「三論」の語の用例を検討したい。

『高僧伝』に「三論」の語は、「義解編」にのみ集中して十回（巻第七・五回、巻第八・五回）用いられている。筆者が検索し得た用例を以下に示す。

a、後祇洹寺又有二釈僧叡一。善二三論一、為宋文所レ重（巻第七「慧義伝」大正五〇・三六九頁上）

b、迺著二成実三論義疏及空有二諦論等一（巻第七「僧導伝」大正五〇・三七一頁中）

c、時中興寺復有二僧慶慧定僧嵩一。並以二義学一顕レ誉。慶善二三論一、為時学所レ宗（巻第七「道温伝」大正五〇・三七二頁上）

d、先是智斌沙門、初代二曇岳一為二僧正一。斌亦徳為レ物宗、善二三論及維摩思益毛詩荘老等一（巻第七「僧瑾伝」大正五〇・三七三頁下）

e、時北多宝慧整長楽覚世、並斉レ名比レ徳。整特精二三論一、為学者所レ宗（巻第七「道猷伝」大正五〇・三七四頁下）

f、鍾妙善二成実三論涅槃十地等一（巻第八「僧鍾伝」大正五〇・三七五頁下）

g、又善二於三論一、為二学者之宗一（巻第八「玄暢伝」大正五〇・三七七頁上）

h、頻講二成実及三論一（巻第八「慧次伝」大正五〇・三七九頁中）

i、初遊二彭城一、従二曇度一受二三論一（巻第八「僧印伝」大正五〇・三八〇頁中）

j、度有二弟子僧朗一。継二踵先師一復綱二山寺一。朗本遼東人。為レ性広学、思力該普。凡厥経律、皆能講説。華厳三論最所二命家一（巻第八「法度伝」大正五〇・三八〇頁下）

以上の用例について順に検討を加えたい。

aは僧叡という「三論」を得意とした人物が祇洹寺にいた、という記述である。これは、四二〇（永初元）年、建康に祇洹寺を建立した慧義（三七二―四四四）の伝に付された記事である。この僧叡と前出の羅什門下の僧叡とは、同一人物の可能性が高い[23]。僧叡は冀州で生まれ、北地で名声を上げ、長安の羅什の訳場において中心的人物となったが、羅什の没後は戦乱を避け、建康に渡っている。南渡した時期については、僧叡六十七歳の頃（四一八年）と考えられる[24]。

bは前出の僧導についての記事である。僧導は僧叡につきしたがい、羅什の訳場に参加しているが、その文脈で「成実三論義疏」を

著したと記されている。したがって、僧導が「義疏」を著したのも、「三論」が出揃った四〇九年から間もない時期であろう。僧導は京兆で生まれたが、おそらく僧叡と同時期に南渡したと思われる。

cは羅什の訳場に参加した道温（三九七―四六五？）の伝に付されたものである。道温は孝建（四五四―四五六）の初めに勅命により中興寺に住している。そして、cは、この道温と同時期に中興寺に住した僧慶という人物が「三論」をよく研鑽し、時の学者に崇められたという記事である。僧慶の生没年はわからないが、だいたい道温と同時代の人と見ることができよう。

dは羅什門下の竺道生の弟子、僧瑾（四七三―四七六年中に七十九歳で没）の伝中の文章であるが、智斌という人物についての記事である。僧瑾は宋の孝武帝（在位四五三―四六四）の勅命で湘東王（後の明帝、在位四六五―四七二）の師となった[25]、という文に続く記事である。智斌は当時の僧正であったが、明帝の四六六（泰始二）年に起こった内乱に荷担したと讒言され、交州へ追いやられてしまったという[26]。智斌についてはこれ以上資料がなく、四六六年までは確実に生存していた、ということしかわからない。

eは前出の僧瑾と同じく道生の弟子であった、道猷（四七三―四七六年間に七十一歳で没）の伝の付伝である。「三論」をよくした、という慧整についてはほかに資料がないものの、当時、慧整と並び称されたという覚世は、『名僧伝抄』によれば、泰始年間（四六五―四七一）に長楽寺に住し、やがて、五十九歳で没したという[27]。確実な年代はわからないが、道猷のやや後輩といったところであろうか。ならば、並び称されたという慧整も同年代ということになろう。

fは前出の僧導の弟子、僧鍾（四三〇―四八九）についての記事である。僧鍾は最初、寿春で僧導に学んだが、後に建康の中興寺に住したという[28]。前出の僧慶が中興寺に住したのと時期的に重なる。何らかの交流があったのかもしれない。

gは玄暢（四一六―四八四）の伝である。玄暢は河西の出身であったが、北魏太武帝（在位四二四―四五二）の廃仏（四四四―四四六頃）の難を揚州に逃れ（四四五年八月）[29]、そのまま没するまで南朝で活動している。玄暢は大部の仏陀跋駄羅訳『大方広仏華厳経』六十巻に初めて注釈したことで有名であるが[30]、「三論」にも通じていたようである。また、玄暢の墓所に立てられた碑文の文章は、周顒（五世紀頃）が著したという[31]。周顒はjの僧朗との交流でも知られる。

hは慧次（四三四―四九〇）という人物が「成実」と「三論」に通じたという記事である。慧次は冀州の出身であったが、十代の頃に建康に至り[32]、没年まで南朝で活躍している。慧次は後に梁の三大法師と称される智蔵（四五八―五二二）・僧旻・法雲（四六七―五二九）が師事したことで有名である。

iは僧印（四三五―四九九）が曇度（―四八八）より「三論」の教学を受けたという記事である。僧印は寿春の生まれで、生涯南朝で活躍する。また、曇度は江陵に生まれ、建康で修学しているが、後

に徐洲に渡り、長安で講説し、そのまま北魏で生涯を終えている。[33] 僧印が曇度に師事したのは、曇度がまだ南地にいた頃であろう。

jは法度（四三七―五〇〇）の伝の付伝で、僧朗（―四七六―五一二―）の伝中の記事である。この僧朗こそ、嘉祥大師吉蔵（五四九―六二三）を輩出した摂山三論学派の開祖である。僧朗は遼東の出身であったが、四七六年頃に南地に渡り、やがて法度の後を継いで摂山栖霞寺に住し（五〇〇年）、摂山三論学派を形成するに至る。後の吉蔵の証言によれば、僧朗はすでに、北地において「羅什師義」を学び、[34] 教学的基礎を固めた上で南渡したとされている。[35]

以上の用例の限り、慧皎は「三論」という語を用いるとき、例えば「中論等三論」などと、具体的な文献名を挙げることはしない。しかし、慧皎が言う「三論」が『中論』『百論』『十二門論』を意味していることに異論はないと思われる。[36] そして、慧皎が「三論」と言う場合、具体的な文献名を挙げないのは、この語が何を示すかが、当時すでに周知となっていたことを意味するのであろう。つまり、慧皎が『高僧伝』を著した五一九年から五五四年までの間には、すでに『中論』等を意味する「三論」という用語が一般化していたと思われるのである。慧皎が「三論」という語を文献名を示さないという方法で用いていることは、むしろ、『高僧伝』が著されるまでに、何者かによって「三論」という用語が周知せしめられており、慧皎もそれにしたがったに過ぎないことを意味しているのではないだろうか。

右に登場した十名は、例外なく南朝で活躍し、生涯を終えた人物である。ただし、aの僧叡、bの僧導、cの玄暢とjの僧朗は、北地で比較的長期間修学した後、南地に渡って活躍するという経緯がある点で異色である。また、以上の十名のうち、生年が最も早いのは僧叡の三五二年、没年が最も遅いのは僧朗の五一二年以降である。十名中、六世紀に入っても生存していたのは僧朗のみである。

前述の通り、五一八年に没した僧祐が「三論」という語を用いた形跡はないから、「三論」という語が一般に周知せしめられたのは五一八年以降と考えられる。また、以上に挙げた十名中、五一八年以降に生存していた可能性を有するのはjの僧朗のみである（五一二年以降に没）。僧朗は、「三論」という用語の一般化に何か関係しているのではなかろうか。

僧朗は前述したように、摂山三論学派の開祖に位置づけられ、大いに「三論」を宣揚したことで知られる。僧朗は四七六年頃南渡したが、摂山栖霞寺に住したのは、法度の没年の五〇〇年であろう。僧朗の名は、『金陵梵刹志』巻第四に収められた、陳代の江総持が著した「棲霞寺碑銘」が伝える五一二（天監十一）年の次の出来事により、梁土に大いに広まったと思われる。

天監十一年、帝乃遣二中寺釈僧懐霊根寺釈慧令等十僧一、詣レ山諮二受三論大義一　（仏寺志第一輯第四冊・四九五頁）

【和訳】

天監十一（五一二）年、梁武帝は中寺僧懐、霊根寺釈慧令など

十僧を使わし、摂山に行かせ、三論の大義を学ばせた。

つまり、梁武帝は僧懐・慧令などの十僧を摂山の僧朗に使わして、「三論」の大義を学ばせたという。武帝がこの直後に著した『大品般若経』の注釈書には、僧朗の影響を思わせる記述があるので[37]、この出来事によって、僧朗の名は当時の仏教界に広く知れ渡ったと思われる。

僧朗が「三論」の語を用いていたかどうかは定かではないが、僧朗から数えて摂山三論学派の第四世代にあたる吉蔵は、盛んに「三論」という語を用いている。吉蔵は「三論」という語を解釈するにあたって、「三」という数字にまで哲学的な意味づけを行っている。[38]このことは、吉蔵以前の世代においてすでに「三論」という用語が定着していたことを意味するのではないか。[39]したがって、僧朗が自ら「三論」という語を用いていたとしても不思議はない。筆者は、僧朗はすでに自ら、「三論」という語を用いていたのではないかと考える。そして、五一二年、僧朗が梁武帝に注目されるに及び、徐々に「三論」という語が周知せしめられ、五一九年以降に著された『高僧伝』によって盛んに用いられることとなったのではないだろうか。

六、結論

まず、従来説では、羅什やその門下においてすでに「三論」という、『中論』『百論』『十二門論』を指す用語が成立していたとされていた。しかし、羅什の翻訳経論や、羅什門下の著述からは、「三論」という語をみつけることができない。したがって、筆者は羅什やその門下が特定の文献を指示して「三論」と呼称していたとは考えにくいと思われる。

では、「三論」の語が用いられたのはいつ頃からであろうか。慧皎が著した『高僧伝』には、周知の語として、盛んに「三論」が用いられている。したがって、『高僧伝』が著された五一九年から五五四年までの間には、「三論」の語が一般に普及していたと思われる。そして、この「三論」の語が一般に普及した要因としては、僧朗の存在が大きいと思われる。僧朗は摂山三論学派の開祖として知られる。僧朗から数えて摂山三論学派の第四世代に当たる吉蔵が、盛んに「三論」の語に意味づけを行っていることから考えると、僧朗がこの語を用いていたとしても不思議はない。

ただし、筆者は必ずしも、僧朗が「三論」という語を発案したと考えているわけではない。僧朗は北地で修学し、羅什系の教学を学んだとされている。年代的なことを考慮すれば、羅什の孫弟子以降の世代に受学したのであろう。羅什の弟子が「三論」という語を用いた形跡はないが、羅什の孫弟子以降の世代の中で発生した用語なのかもしれない。一つの可能性として以上のような推測も可能であろう。「三論」という用語の始源については、今後の検討課題としたい。

註

① これらは古来、東アジアの漢字文化圏において、インドの論師、龍樹（nāgārjuna、一五〇頃―二五〇頃）の中観思想を知るための代表的文献として流通した。日本でも、奈良時代のいわゆる「南都六宗」の一つに「三論宗」が位置づけられている。ただし、『中論』は「龍樹菩薩造梵志青目釈」という撰号に示されるように、原典は龍樹が作した偈頌を、後代の青目（piṅgala、三世紀頃）が注釈したものと考えられる。また、『百論』も龍樹の弟子、提婆（āryadeva、三世紀頃）作の本文に、後代の婆數開士（vasu、年代不明）が注釈したものとされている。だから、「三論」は龍樹にまつわる文献ではあるが、龍樹の著作ではない。

② (1)説は古くから行われていたようであり、平井俊榮氏は次のように述べている。「『中論』『百論』『十二門論』という三部の論を総称して「三論」と呼ぶようになったのは、何時ごろからなのか、必ずしも明らかではない。僧伝によれば、同じくクマーラジーヴァの弟子に僧導があり、彼の著した『三論義疏』が三論の名称のはじまりであるともいわれるが、本書はつとに散逸し、日本南都の三論宗は勿論のこと、中国においても伝承された形跡は全く見られないので確かなことは不明である。（中略）したがって、単に中・百・十二門の三部の論それぞれに僧導が「義疏」を著したものを、僧伝の著者が総括して「三論の義疏」と称したとも考えられる。それ故、「三論」の名称が僧導の『三論義疏』にはじまるというのは、確かな根拠を持たない後世の俗説であるかも知れない」（「三論とは何か」同著『中国般若思想史研究―吉蔵と三論学派―』序論、春秋社、一九七六）。平井氏はこの直後の文章で(2)説を主張している。

③ 前掲「三論とは何か」。

④ 相馬一意氏は、『高僧伝』に「四論」という語が現れないことから、この語が用いられるようになったのは『高僧伝』以降ではないかと推測している（「高僧伝等における四論の研究者」『行信学報』通刊第十三号、二〇〇〇）。また、筆者の調査の限り、現存する文献で「四論」という用語が初めて現れるのは吉蔵の『二諦義』である。

⑤ 前掲「三論とは何か」。

⑥ 「三論」の訳出年代については、平井俊榮氏によって簡潔にまとめられている（「羅什による中観系仏教論書の翻訳」前掲『中国般若思想史研究』第一篇第二章第一節）。

⑦ 羅什門下の僧肇が著した「百論序」（僧祐集『出三蔵記集』巻第十一所収）に「以弘始六年、歳次寿星、集理味沙門与什、考校正本」（大正五五・七七頁下）と記されている。

⑧ 僧肇は「百論序」で次のように証言している。「有天竺沙門鳩摩羅什。器量淵弘、俊神超邈。鑽仰累年、転不可測。常味詠斯論、以為心要。先雖親訳、而方言未融。致令思尋者、躊躇於謬文、標位者、乖迕於帰致」（大正五五・七七頁中）。羅什は『百論』を愛好し、以前にも丁寧に翻訳した。しかし、（長安に来たばかりで）語学能力がまだ万全ではなかったので、翻訳がうまくいかなかった。つまり、僧肇が序を著す以前に、すでに一度『百論』が漢訳されていたというのである。これを裏付けるのは、吉蔵の著作『百論疏』「百論序疏」の次の証言である。**「但百論有二序。一叡師所制、二肇公所作。**興皇和上、毎講常読肇師序。正為其人言、巧意玄妙符論旨。親睹時事、所以稟承。又**叡師序、是弘始四年前翻。**什師初至、方言未融、為此作序、猶未中詣。肇師序、即是此文六年重翻。文義既正、作序亦好。所以恒読肇公序也」（大正四二・二三二頁上）。興皇和上とは吉蔵の師の興皇寺法朗（五〇七―五八一）。すなわち、『百論』には僧叡・僧肇によってそれぞれ著された二つの序が存在しており、法朗は、講述する際は僧肇序ばかりを取り上げていた。僧叡序は弘始四（四〇二）年に最初に『百論』が翻訳されたときに製作されたが、翻訳が不完全であったために、序もあまりよいものはできなかった。しかし、弘始六（四〇四）年に『百論』が再び翻訳されると、文章も素晴らしく、したがって、僧肇が序を製しても、よいものができた。

だから、法朗はいつも僧肇序を読んだ。以上が右に引用した資料の要約である。残念ながら僧叡序は現伝していないが、「百論序疏」では僧叡の見解が引用されているから、吉蔵の手元にはあったの可能性がある。

⑨ 『出三蔵記集』巻第十一に僧叡・曇影それぞれが著した二本の「中論序」が残っていることは、前述の『百論』同様、二度の翻訳が行われたことを想起せしめる。ところで、僧肇は四〇五年頃に『般若無知論』を著しているが（中田源次郎「肇論解題」『国訳一切経　和漢撰述部』諸宗部一、大東出版社、一九三七）、ここにはすでに、『中論』の趣意引用が見られる。つまり、この時期までには早くも『中論』が翻訳されていたことになる（前掲平井俊榮「羅什による中観系仏教論書の翻訳」）。

⑩ 二度目の翻訳時期については、『出三蔵記集』巻第十一所収の曇影「中論序」の末尾に「羅什法師以秦弘始十一年於大寺出」（大正五五・七七頁中）と注されていることを参照。

⑪ 『出三蔵記集』巻第十一所収の僧叡の「十二門論序」に「羅什法師以秦弘始十一年於大寺出之」（大正五五・七八頁上）とあるを参照。

⑫ 塚本善隆氏は四〇九年没説を主張している。ただし、塚本氏も「一応」と断っているように、確定的な説ではない（「仏教史上における肇論の意義」塚本善隆編『肇論研究』第二篇研究篇、法蔵館、一九五五）。また、近年では斉藤達也氏が、四一一年没説を主張している（「鳩摩羅什没年問題の再検討」『国際仏教学大学院大学研究紀要』第三号、二〇〇〇）。

⑬ 電子テキスト、中華電子仏典協会「CBETA 電子仏典（大正蔵）」（『印順法師仏学著作集 Ver.3.1』財団法人印順文教基金会発行、台北、二〇〇二）によるコンピュータ検索を用いた。

⑭ ただし、たとえば、羅什訳『提婆菩薩伝』一巻に「是時提婆於王都中建高座、立三論。言一切諸聖中仏聖最第一。一切諸法中仏法正第一。一切救世中仏僧為第一」（大正五〇・一八七頁中）とあるように、『中論』等の論書を示す語として用いられていない場合は無視する。

⑮ 『高僧伝』の撰述時期ははっきりしないが、記載されている事跡の最下限は五一九年である。そして、慧皎の没年が五五四年であるから、その成立はこれをさかのぼらない。

⑯ 常盤大定氏は、『高僧伝』第十四巻に収められる慧皎の「序録」と、その弟子・王曼顒が著した「書信」から、慧皎が少なくとも次の十八種の文献を参照していたとしている（「梁高僧伝解題」『国訳一切経』和漢撰述部・史伝部七、一九三六）。①晋法済「高逸沙門伝」②斉法安「志節」③僧宝「遊方」④法進「論伝」⑤瑯琊王巾「僧史」⑥梁僧祐「三宝紀」⑦中書郎郄景興「東山僧伝」⑧治中張孝秀「廬山僧伝」⑨宋臨川康王義慶「宣験記」「幽明録」⑩太原王延秀「感応伝」⑪朱君台「徴応伝」⑫晋陶淵明「捜神録」⑬太原王琰「冥祥記」⑭彭城劉俊「益部寺記」⑮宋曇景「京師塔寺記」二巻⑯斉竟陵文宣王「三宝紀伝」⑰中書陸明霞「沙門伝」⑱梁宝唱「名僧伝」並序録目三十一巻。ちなみに、この中で完全な形で現存するものは、⑫のみである。もちろん、慧皎が参照したものは、以上の十八文献に限らないと思われる。

⑰ 電子テキスト、前掲「CBETA 電子仏典（大正蔵）」によるコンピュータ検索を用いた。

⑱ 僧祐の著作は、ａｃｅの三部しか現存していないが、『高僧伝』巻第十一「僧祐伝」には「初祐集経蔵既成、使人抄撰要事。為三蔵記、法苑記、世界記、釈迦譜及弘明集等。皆行於世」（大正五〇・四〇二頁下―四〇三頁上）と伝えられ、ほかに「法苑記」「世界記」などの著述があったことが知られる。また、唐の道宣（五九六―六六七）は『大唐内典録』巻第十「歴代道俗述作注解録」において、僧祐に十一部の著作があったことを伝えている（大正五五・三三一頁中）。

⑲ 『続高僧伝』巻第一「宝唱伝」に「初唱天監九年、先疾復動。便発二願。遍尋経論、使無遺失。捜括列代僧録、創區別之。撰為部帙。

号曰名僧伝三十一巻。至十三年、始就條列」（大正五〇・四二七頁中）とあるを参照。

⑳ 蘇晋仁「撰写年代」（蘇晋仁・蕭鍊子校『中国仏教典籍選刊　出三蔵記集』序言（三）、中華書局、北京、一九九五）に詳しい。

㉑ 覚岸（十四世紀頃）『釈氏稽古略』巻第二には、天監十六（五一七）年のこととして、『比丘尼伝』が著されたことを伝えている（大正四九・七九六頁中）。一方、智昇（八世紀頃）『開元釈教録』巻第六には「天監年中、頻勅撰集、皆愜帝旨。十五年景申、又勅撰経律異相一部。**唱又別撰尼伝四巻**」（大正五〇・五三八頁上）とある。この記述は一見、『比丘尼伝』が『経律異相』と同じ天監十五（五一六）年に著されたことを示しているように思える。

㉒ dは梁武帝の勅撰であるが、序に次のように記されていることから製作の経緯が分かる。「**以天監七年、勅釈僧旻等**、備鈔衆典、顕証深文、控会神宗。辞略意暁、於鑽求者已有太半之益。但希有異相猶散衆篇。難聞秘説未加標顕。又以十五年末、勅宝唱、鈔経律要事。皆使以類相従。令覧者易了。又**勅新安寺釈僧豪、興皇寺釈法生等**、相助検読。於是博綜経籍、択採秘要。上詢神慮取則成規。凡為五十巻、又目録五巻、分為五秩。名為経律異相」（大正五三・一頁上）。つまり、天監七（五〇八）年に僧旻が原型を撰し、天監十五（五一六）年、それに宝唱等が増補・編集の手を加えたものが、現伝している『経律異相』であるという。

㉓ 横超慧日氏は『高僧伝』に登場する僧叡と慧叡が同一人物であることを論証した論文において、両僧叡を同一人物としている（「僧叡と慧叡は同人なり」『東方学報　東京』第十三冊之二、一九四二）。

㉔ 前掲横超慧日「僧叡と慧叡は同人なり」参照。

㉕『高僧伝』巻第七「僧瑾伝」「宋孝武、勅為湘東王師。苦辞以疾、遂不獲免。王従請五戒、甚加優礼」（大正五〇・三六三頁下）。

㉖ dの文に続いて「後義嘉構釁。時人讒斌云、為義嘉行道。遂被擯交州」（大正五〇・三七三頁下）とあるを参照。「義嘉」については、『宋書』「列伝」四〇に「泰始二年正月七日、泰子勛為帝、即偽位於尋陽城、年号**義嘉**元年。〈略〉沈攸之諸軍至尋陽、誅子勛及其母、同逆皆夷滅。子勛死時年十一、即葬尋陽盧山」（宋書第七冊・二〇六〇頁）とあるを参照。

㉗ 新卍続七七・七五三頁中。

㉘「僧鍾伝」に「釈僧鍾、姓孫、魯郡人。十六出家。居貧履道。嘗至寿春、導公見而奇之〈中略〉後南遊京邑、止于中興寺」（大正五〇・三七五頁下）とあるを参照。

㉙「玄暢伝」に「其後虐虜剪滅仏法、害諸沙門。唯暢得走。以元嘉二十二年閏五月十七日、発自平城。路由岱郡上谷、東跨太行、路経幽冀。南転将至孟津。唯手把一束楊枝一扼葱葉。虜騎追逐、将欲及之。乃以楊枝撃沙。沙起天闇。人馬不能得前。有頃沙息騎已復至。於是投身河中。唯以葱葉内鼻孔中通気度水。以八月一日達于揚州」（大正五〇・三七七頁上）とあるを参照。

㉚「玄暢伝」に「初華厳大部、文旨浩博。終古以来未有宣釈。暢乃竭思、研尋提章比句、伝講迄今、暢其始也」（大正五〇・三七七頁上）とあるを参照。

㉛「玄暢伝」に「止住霊根少時而卒。春秋六十有九。是歳斉永明二年十一月十六日。即窆于鍾阜独龍山前。臨川獻王立碑。**汝南周顒製文**」（大正五〇・三七七頁中）とあるを参照。

㉜「慧次伝」に「釈慧次。姓尹、冀州人。初出家、為志欽弟子。後遇徐州釈法遷、解貫当世。欽乃以次付嘱、仍随遷。南至京口、止竹林寺。至年十五、随遷還彭城」（大正五〇・三七九頁中）とあるを参照。

㉝『高僧伝』巻第八「曇度伝」「釈曇度、本姓蔡、江陵人。〈略〉乃造徐州、従僧淵法師更受成実論。〈略〉以偽太和十三年、卒於魏国。即斉永明六年也。撰成実論大義疏八巻、盛伝北土」（大正五〇・三七五頁中）。

㉞ 吉蔵『二諦義』巻上「摂山高麗朗大師、本是遼東城人。従北土遠習**羅什師義**」（大正五〇・一九頁中）。

㉟ 僧朗については平井俊榮「摂山三論の淵源」（前掲『中国般若思想史研究』第一篇第四章第一節）及び「僧朗の事績と吉蔵の証言」（前掲『中国般若思想史研究』第一篇第四章第二節）参照。

㊱『高僧伝』中の「三論」が、『中論』『百論』『十二門論』以外の何らかの論書を指しているとしたら、それは具体的に何であろうか。筆者には思い当たる文献がない。

㊲ 前掲平井俊榮「僧朗の事績と吉蔵の証言」参照。

㊳ 吉蔵の『三論玄義』には次のようにある。「問、既有四論。何故常称三論耶。答、略有八義。一者、一一論、各具三義。一破邪、二顕正、三言教。以同具此三義故、合名三論。二者、三論具合方備三義。中論明所顕之理、百論破於邪執、十二門名為言教。以三義相成故、名為三論。三者、中論為広論、百論為次論、十二門為略論。三部具上中下三品故、名三論。四者、一切経論、凡有三種。一但偈論、即是中論。二但長行論、所謂百論。三亦長行亦偈論、即十二門論。以三部互相開避、而共相成。五者、此之三部、同是大乗通論。故名三論。六者、此三部、同顕不二実相。故名三論。七者、同是四依菩薩所造。八者、同是像末所作。但欲綱維大法也」（大正四五・一二頁下）。右の文で吉蔵は、「三論」というまとまりの重要性を主張するが、『大智度論』を加えた「四論」ではいけないのか、という問いを自ら立てて、それに自答している。筆者にはこの自問自答について、少なからず理解できない部分がある。例えば、第六問の「不二実相を顕す」という表現は、『大智度論』にもあてはまるのではないか。また、第七問・八問についても、『大智度論』が除外される理由が理解できない。この自問自答は、先に「三論」という用語が念頭にあって、後に「破邪・顕正・言教」「広論・次論・略論」「偈論・長行論・長行亦偈論」などの意味づけがなされたのではないかと思われる。

㊴ 吉蔵はその著『二諦義』巻上において、「四論」について解釈する際に法朗の学説を引用する（「叡師中論序云、百論治外、以閑邪。斯文祛内、以流滞。大智釈論之淵博、十二門観之精詣。尋斯四論者、真若日月在懐、無不朗然鑑徹矣。若通此**四論**、則仏法可明也。**師云**、此**四論**、雖復名部不同、統其大帰、並為申乎二諦、顕不二之道」『二諦義』巻上・大正四五・三七一頁上―中）。「四論」は「三論」から派生した用語と思われるので、少なくとも「三論」という語は法朗の世代（摂山三論学派第三世代）に用いられているはずである。

【資料略号】

大正＝『大正新修大蔵経』
新卍続＝『新纂大日本続蔵経』
宋書＝『宋書』八巻、中華書局、北京
仏寺志＝『中国仏寺志彙刊』明文書局、台北